慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	下出隼吉の日本社会学史研究： 日本社会学史研究における継続と継承
Sub Title	Shunkichi Shimode's study of Japanese sociological history
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1994
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.67, No.5 (1994. 5) ,p.1- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19940528-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

下出隼吉の日本社会学史研究

――日本社会学史研究における断続と継承――

川合隆男

(一) はじめに
(二) 有賀喜左衛門および樋口秀雄による社会学史研究
(三) 下出隼吉の日本社会学史研究
(四) むすび

(一) はじめに

小論「下出隼吉の日本社会学史研究」は近代日本社会学史研究のための一つの発掘作業であると考える。わたくしは先に「日本社会学の最近の動向と反省」と題する過大な表題のもとに論稿をまとめたことがあるが(1)、それは戦後日本の社会学の歩みだけでも四〇余年の足跡・動きを顧みるときに学問活動としての社会学の制度化がもたらした積極的な利点・評価とともに、学問環境の急速な変化と制度化そのものに内在化してくる諸問題をあくまで一社会学徒として再考察してみようとしたものであった。社会学の学問活動が他の学問分野と交錯しつつ理論的視座もさまざまに

競合複合し、調査活動も多様な分野で極めて盛んに試みられている。一学徒の身の丈を越えて学問活動がますます隆盛化し巨大化し専門的に細分化されていけばいくほど、社会学全体の歩みや学問構成、そして自らを位置づけ、点検する作業は困難になりがちである。しかし、戦後日本社会についても更には近代日本社会についても、「社会学はその歴史的発展の過程において不断に学問的基礎づけを要求されて来たものであって、私たちはその成果を歴史的に検証し究明することによって、やがてまた社会学の学問的構成の歴史的な帰向をも確認することが出来る」[2]という原点に立つべきであろう。社会学史研究が社会学の歴史的発達の単なる記述や特定の史観による社会学的批判にとどまることなく、内在的な自己変革に働きかけ得るものであることが望ましい。

近代日本社会学史研究は、今日の学説史研究の現況や学史研究への関心に比すれば、依然限られたものであり乏しいといわなければならない。近代日本社会学史研究が依然として乏しいというだけでなく、研究史における批判的継承が試みられてこなかったとも考えられるし、学史研究のための学問的方法論も充分に深められているとはいい難い。特に下出隼吉（しもでしゅんきち）（一八九七―一九三一年、明治三〇―昭和六年）の日本社会学史研究については、言及されてはきたものの、三十五歳で急逝し研究が中断したこともあってその内容的な研究や検討は試みられてこなかったといえる。

下出隼吉は存命の短い研究期間中に「明治社会学史資料」(一)(二)にみられるように特に明治期の社会学史資料の集成に力を注いだといえる[3]（下出隼吉の業績は『下出隼吉遺稿』（一九三二年）、『明治社会思想研究』（一九三二年）に収録されている）。下出の研究業績は、当時の日本の歴史的な社会状況や社会学の動向に照らして、日本社会学への展望の渦巻くなかで、下出の没後数年のうちに発表された松本潤一郎「日本社会学の沿革と展望」（一九三二年）、高田保馬「日本に於ける社会学の発達」（一九三三年）、加田哲二「日本の社会学及び文献」[4]（一九三四年）などの諸論に確実に参照され影響を及ぼしていった。松本潤一郎は「日本社会学の沿革と展望」の章末に下出隼吉や布川静淵の文献に言及しており、高田保馬は、「私が前述の如く困難なる事情の下にあって、而も此述作をまとめ得たのは、全く次の両書

の力を借り得たるが故である。記して感謝の意を表すると共に、読者の参照を望む」として、松本潤一郎氏「日本社会学の沿革と展望」（松本潤一郎氏編『社会学――学説と展望』収載、一―九〇頁）。下出隼吉氏『下出隼吉遺稿』、「研究篇」（ことに「明治社会学史資料」、一七三―二三三頁）を挙げていることからも知ることができる。[5] その後の終戦までの時期になされた日本社会学史に関する主な文献としては、清水幾太郎『社会学批判序説』（理想社、一九三三年）『日本文化形態論』（一九三六年）、早瀬利雄『現代社会学批判』（同文館、一九三四年）、加田哲二『明治初期社会経済思想史』（一九三七年）、松本潤一郎『日本社会学』（時潮社、一九三七年）などがある。

終戦後の社会学史研究、特に日本社会学史研究も東京社会科学研究所編『社会学史』（『現代の社会学・第二巻』）（実業之日本社、一九四八年）などを皮切りに再開され、ついに一九六〇年（昭和三五年）には「……改めて日本社会学史の総合的・体系的な研究の必要を深く痛感せざるを得ない。ここにわれわれ同学の徒相寄り、日本社会学史学会を創設し、如上の趣旨の達成をはからんとするものである」[6]として「日本社会学史会」が設立され今日に至っている。この間において、河村望『日本社会学史研究（上・下）』（人間の科学社、一九七三年、一九七五年）、秋元律郎『日本社会学史――形成過程と思想構造――』（早稲田大学出版部、一九七九年）、斎藤正二『日本社会学成立史』（福村出版、一九七六年）などの秀れた研究が積み重ねられてきている。しかし、先に触れた終戦前期においては漸く開始されるようになった日本社会学史研究の当時の研究水準に照らして下出隼吉の研究に言及することも多かったが、終戦後の研究においては下出隼吉の研究については、「日本の社会学史の本格的研究は下出隼吉によってはじめられたが、明確な問題意識をもって日本の社会学の成立とその発展を批判的に検討したのは清水幾太郎をもってはじめとすることができよう」[7]（河村望）とする指摘や斎藤正二によって「従来の研究の主なものをみると、下出隼吉『明治社会思想研究』（昭和七年）は多くの蒐集した資料に基づいて書かれているが、社会学の移入過程や社会学の思想的系譜、すなわち縦・横を通した歴史的な系譜と現在的な拡がりについての追求は為されなかった。しかも、日本社会学の前史や起源とい

う点については何等触れることなく、もっぱら主力を注いだのは資料の解説（この研究の特徴をなす）にあった[8]」という指摘にみられるごとく、その位置づけについての特徴が示されている。各々特定の社会観・歴史観や社会学観に貫かれた日本社会学史研究が展開されることになったが、「日本の社会学史の本格的な研究」「従来の主な研究」である下出隼吉の日本社会学史研究そのものについての研究はむしろ深められることのないままにされてきたのではないだろうか。そうであれば、日本社会学の歩みや発達を適切にとらえることにはならないと考えるし、日本社会学史研究の可能性を限定し学史研究の視点や社会学史観を狭くし固定化してきてはいないだろうか。

この小論では、(i)下出隼吉がむしろ社会学史資料に重点をおいて日本社会学史研究を試みようとしていた姿勢を重視して、学史研究の実証的経験的研究の必要性を考えてみること、(ii)そうした試みから逆に下出隼吉の学史研究の視点（社会観、社会学観、対象、方法等）を探り出すことができるかどうかを検討してみること、(iii)下出隼吉の日本社会学史研究の研究史のなかでの位置づけや批判的継承を試みること、更に、(iv)学史研究における①学史研究の問題構成、学史研究の課題、②学史の視点、③資料、④研究史、という連関を再構築する作業、などを考察してみたい。

(二) 有賀長雄および樋口秀雄による社会学史研究

日本社会学史研究において、その「本格的な研究は下出隼吉によってはじめられた」（前出・河村）という位置づけや「従来の研究の中の主なもの」として「下出隼吉『明治社会思想研究』（昭和七年）」を挙げておられる（前出・斎藤）のは、適切である。ここでは、下出隼吉の日本社会学史研究の再考察を試みるうえで、まず下出隼吉による日本社会学史研究が開始される以前の学史研究の動きについて概観しておきたい。

下出隼吉以前の社会学史研究として「社会学史」の名称で執筆されて印刷物として今日われわれに残され・利用し得るものは、有賀長雄「社会学史[9]」（明治二一―二三年）と樋口秀雄『社会学小史[10]』（明治四四年）であろう。学問運動

としての近代の社会学の生成自体はそれぞれの歴史的社会的諸条件によって異同が生じるのは当然であるし、その学問の歩みや歴史に対する関心がおこり研究が試みられるようになるには、ある一定の間合いや経緯が存在する。わが国の大学で社会学が最初に学科課程の中に講義として講じられたのは東京大学においてであった。その東京大学に一八八一（明治一四）年当初は名称は「世態学」であったが、一八八五（明治一八）年に世態学は学科課程の中で「社会学」と改められた。[11] しかし、『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』のなかにはそれより数年前の「明治十一年九月米国人フェノロサ（Ernest F. Fenollosa）（1853—1908）は本学（当時「東京大学」）に教授として来朝し、哲学・政治学・理財学を講じたが、同年度の史学・哲学・政治学科の三年生に政治学を教授するに当って、その前提として社会学を教えた」[12] と記されている。エドワード・モース（Edword S. Morse）の推薦によって外国人教師として明治一一年に東京大学に着任して明治十九年に辞任したフェノロサの「世態学」（社会学）に関する講義内容は次のようなものであった（「政治学理財学教授エルネスト、エフ、フェノロサ申報」（講義内容に関する大学総理宛の報告書））。

方今世態開進シテ大ニ其面目ヲ改ムルヲ以テ本科ノ始メニ社会原論ノ一課目ヲ加ヘ而シテ生徒ヲシテ社会ハ其組織千状万体ニシテ百般ノ活動ヲ作ス一箇ノ有機体タルヲ認得セシメ因テ其人世ノ活機ニ暁通スルニハ其由来ト発達トニ就キテ専ラ研究セサルヘカラサルノ理ヲ知ラシメタリ而シテ其読了セシムル所ノ書ハスペンサル氏著社会原論第一巻バジホット物理政理相関論並ニモルガンノ古代社会論ニシテ課業ハ大抵口授ヲ以テス既ニシテ社会学ノ大意ヲ了スルノ後更ニ今代哲学史ノ要領ヲ遂次ニ講述シ乃チ純粋哲学原論ニ就テ哲学ノ実業上ニ欠クヘカラサル理由ヲ説明シ且方今哲学諸派ノ実際景況如何ヲ了知セシム之ニ次テ実地哲学ヲ講シ道徳政治ノ当否ヲ批評シ其真正ナル学問ノ方法ヲ了得セシメン為ノ無関論（レーゼーフェール）及其応用ノ弁ヲ以テス但シ該無関論ハスペンサル氏自ラ可実施ノ理論ト明言セル所著ノ社会静象学（ソシアルスタチックス）書ヲ以テ教科書トシテ且日々ノ講義ニ於テ批評ノ方ヲ授ケ且ツ間々既ニ修ムル所ヲ筆記セシメテ課程ニ代ヘシコト有リ之ヲ要スルニ生徒ノ学業ハ渾テ良結果ヲ得シト云フヘシ[13]

フェノロサが当時用いていた社会学書は、H. Spencer : Principles of Sociology, vol. 1, 1876, Social Statics, 1850, W. Bagehot : Phisics and Politics, 1872, L. H. Morgan : Ancient Society, 1877 などであったことが

うかがえる。

フェノロサが一八八六（明治一九）年八月に帝国大学文科大学（帝国大学令によって明治一九年三月に東京大学は帝国大学、文学部は文科大学に改称）を辞任した後に文科大学で専ら社会学を担当したのは外山正一（当時は文科大学長で、彼が明治三〇年一一月に東京帝国大学総長に就任するまで担当）であった。外山正一（一八四八―一九〇〇）は、『民権辯惑』（明治一三年）、「日本知識道徳史」（草稿）、「神代の女性」（『哲学雑誌』明治二七年第一〇巻）、そしてスペンサー原著・乗竹孝太郎訳『社会学之原理』（全三冊）（明治一七―一八年）に寄せた（外山による）新体詩による社会学啓蒙の「序文」などを執筆したが[14]、彼の社会学書や社会学史書は公刊された形では残されてはいない。三上参次・建部遯吾の編纂による外山正一の遺稿集である『丶山存稿』のなかに「大学に於ける講義案には「社会学案」英文三種邦文一種主としてプラトー、ホッブス、モンテスキウ、コント、キッド、グムブロキッツを叙述顕現せる「社会学史案」英文及邦文六種「心理学案」英文一種「心理生理学案」英文一種「心理学資料」英文一種及「論理学案」英文一種あり其他また「歴史雑纂」英文一種あり」とし、「他日好機を得ば此類を一括して別個の編纂を試みるを可とすべし」[15]と記されているが、今日までその機会は得られていない。

明治期の比較的まとまった社会学書としては、岸本能武太『社会学』（明治二三年、大日本図書）、建部遯吾『普通社会学』（第一巻・社会学序説、明治三七年、第二巻・社会理学、明治三八年、第三巻・社会静学、明治四二年、第四巻・社会動学、大正七年）（金港堂）、遠藤隆吉『近世社会学』（明治四〇年、成美堂）、小林郁『社会心理研究』（明治四三年、育英舎）などを挙げることができる。これらのなかで、社会学史に関連するところがどのように扱われていたのかを抜きだしてみると、岸本能武太『社会学』では社会学史に直接にかかわる部分はない。建部遯吾『普通社会学』ではその第一巻『社会学序説』の「第二編史論」において、その「第二章社会学の源流」「第三章社会学の成形」「第四章社会学の將来」のところで社会学史に関連して説かれているが、社会学史研究という視点からすると、史論ではあり得るとして

も余りにも宏大で断定的であり論拠の学問的な検討を欠いた学史論といわなければならないであろう。[16]

遠藤隆吉『近世社会学』では、その「第二章従来の社会学系統」で社会学史にかかわるところを扱っており、具体的には「第一節緒言、第二部スペンサー氏の社会学、第三節ウァード氏の社会学、第四節ラッツェンホーヘル氏の社会学、第五節シェフレー氏の社会学、第六節スモール、ギンセント氏の社会学、第七節パラント氏の社会学、第八節スタッケンベルグ氏の社会学、第九節グムプロウィッチ氏の社会学、第一〇節タルド氏の社会学、第一一節ギッディングス氏の社会学、第一二節デュルケーム氏の社会学、第一三節ジンメル氏の社会学、第一四節結論」[17]をとりあげて社会学は、「コムト」の社会学系統の如く社会の組織論ではなく、社会の原動力（社会心意）を研究すべきであるとする観点から社会学論を位置づけている。この当時の社会学の動向を反映した社会学論、学史展開がなされているといえる。小林郁『社会心理研究』では、「附録」で「ブラックマー氏社会学綱要評説」のなかで（第一七章）「社会学史」を紹介している（Franklin W. Blackmar and J. L. Gillin, Elements of Sociology, 1905）。

この期の社会学史研究として触れておくべきものは、有賀長雄のそれであろう。有賀長雄（一八六〇―一九二一年）は、フェノロサの在任当時の東京大学文学部哲学科を卒業して（明治一五年卒業）、明治一九年から二〇年にかけて、ドイツ、オーストリアに自費留学し、シュタインの法学の講義を聴いて帰国。また、元老院書記官、枢密院書記官、農商務省特許局長、国際法法律顧問等々を歴任し、社会学者、国法学者、国際法学者としても広く知られ内外に活躍した人物である。日本人による最初のまとまった社会学書である『社会学・一巻（社会進化論）』（明治一六年一〇月、東洋館書店）、『社会学・二巻（宗教進化論）』（明治一六年一二月）、『社会学・三巻（族制進化論）』（明治一七年六月）、『国家学』（明治二二年、牧野書房）、『国法学』（上・下）（明治三四―三五年、東京専門学校出版部）、『近時外交史』（明治三八年、東京専門学校出版部）、『最近三十年外交史（上・下）』（明治四三年、早稲田大学出版部）などの著書があり、訳書にフェノロサ『東亜美術史綱（上・下）』（大正九年）（昭和二二年復刻、創元社）などがある。早稲田大学、陸軍大学、東京帝国大

学、慶應義塾大学[18]などで国際法、政治史、外交史等の講師をもつとめた。[19]

有賀の『社会学』（全三巻）（明治一六―一七年）の大作は彼が大学卒業後間もない二十四―二十五歳当時の著作であったが、『哲学会雑誌』に明治二一年から二三年の間に五回にわたって「社会学史略」（社会学史）を執筆している。有賀のこの社会学史は、一冊の書の形に復刻版としてまとめられているので今日では復刻版を活用することができる。[20]「社会学史略（第一）」では、社会学の諸家および沿革書、社会学の始祖を論じている。アルフレッド・フィエ『近時社会学論』（一八八〇年）、フリドリヒ・ベーレンバフ『現時社会学の学派及び統系』（一八八二年）、そして特にグンプロウィッ『社会学原理』（一八八五年）を参考にして社会学史の大要を述べていく旨を記し、まず社会学の始祖としてオウグスト・コントをとりあげている。コントの「人類発展の理法」に関して、有賀は「時としては、本国なるフランスのみを人類全体の如くにみなして講究の料としたるがために、わずかに欧米の二三国民に影響したるも、世界の人類の多分にはまったく関係せざりしフランス革命を以て、人類全体の転変の如く論じなせり。かくの如くなるを以て、コントの社会学たるその言論は、すなわち活発なるもの多しといえども、これを真の理学上の目より見ては、未だ貴価ありとなすあたわず。その名の世に高くして、その説の実功に乏しき所以のもの、ここにあり」[21]と評していた。

「社会学史略（第二）」では、コント社会学の意義、ケテレー社会学、ケテレー社会学の謬誤を論じている。次に「社会学史略（第三）」において、スペンサーの大功をとりあげ、「そのもっとも称賛すべきところは、ことごとく自己の予科（プレデスホジション）を去り、まったく事実にもとづいてこの学の原理を究定したるにあり」[22]として、『社会学講究法』『社会学材料』『社会学原理』に触れて、更にスペンサー社会学の構想と欠点にも論じ及ぶ。「社会学史略（第四）」では、有賀の既書『社会学（三巻）』（族制進化論）とも関連するスペンサーの血族関係論、スペンサー族制論の概要、スペンサー族制論への疑問、家族と日本法制について触れ、（スペンサー）「氏にして、もし東洋の歴史に

通じ、はたしてここに（筆者註、儒教の本源に）着目するところありたらんには、その社会学の規模は、一層広潤にして宇内を全包することを得べかりしなり」[23]と評している。続いて「社会学史（第五）」（この第五では「社会学史略」ではなく「社会学史」の論題となっている）においても、「戦闘体社会」と「産業体社会」の区別、強者弱者の生存競争にもとづくスペンサーの儀式論、スペンサー儀式論の瑕瑾、スペンサー政事進化説批判を試みている。

斎藤正二がその有賀長雄『社会学史』の「解説」で「有賀長雄「社会学史」の意義」について、㈠社会学の起源および社会学思想の系譜的発展が明らかでなく、㈡学史としての叙述があまりにスペンサー社会学に偏重し、㈢アメリカ社会学―殊にウォードの社会学には何等言及されておらず、独・墺社会学―殊にローレンツ・フォン・シュタイン等の社会学にも論及していないなどの欠陥があるが、「日本の早期に、体系ある社会学史の最初の叙述として、その価値は高く評価されてよい、意義あるものである」[24]と位置づけているのは適切である。しかし、有賀がこれを執筆していた時期以降は彼の研究関心が国家学、外交史、国際公法等に急速に傾斜していったこともあって、有賀の社会有機体説を基礎においた社会学史研究も中断し日本社会学史研究も深められることはなかった。

これ以後に、学問運動としての社会学の学問活動が新たにより広く組織化・制度化されていく動きのなかで「社会学会」の設立（明治二九―三一年）による機関雑誌『社会雑誌』（明治三〇年四月―三一年八月）、更に「社会学研究会」（明治三一―三六年）による雑誌『社会』（明治三二年一月―三四年一二月）『社会学雑誌』（明治三五年二月―三六年四月）の活動も注目されるところであるが[25]、当時の歴史状況と学問動向を鋭く反映して多くの注目すべき論稿が多いにもかかわらず社会学史研究に関する論稿は殆んどない。岡百世「社会学史（其一）」（『社会』第二一号、明治三三年一二月）、「社会学史（其二）」「『社会』第三巻一号、明治三四年一月）、「社会学史（其三）」（『社会』第三巻二号、明治三四年二月）の試みも、グンプロウィッ『社会学』に従ってコント、スペンサー、バスチアン、リッペルトの社会学についてそれらの大意を訳出したにすぎないものであった。

このような経緯のもとで明治期における社会学史研究としてもっとも注目される試みは、樋口秀雄（龍峡）『社会学小史』（明治四四年）である。樋口秀雄（一八七五―一九二九年、明治八―昭和四年）は、明治三三年に東京帝国大学文科大学哲学科（社会学専攻）を卒業、評論家、社会学者、衆議院議員（大正四年に選出）など多才な活動をし、明治大学、国学院大学、法政大学、大谷大学等でも講師として教鞭をとった。著作には、『社会学小史』の他に、『時代と文芸』（明治四二年、博文館）、樋口秀雄編著『社会政策と近世科学』（明治四二年、金港堂）、『社会主義と国家』（明治四二年、日高有倫堂）、『社会論叢』（明治四二年、日高有倫堂）、編『自ら進んで取れ』（明治四三年、広文堂）、『社会学十回講義』（明治四五年、二松堂）、『近代思想の解剖』（大正二年、広文堂）、『群衆論』（大正二年、中央書院）などがある。[26]

樋口秀雄『社会学小史』は、「序論、第一章古代に於ける社会学的研究、第二章中世に於ける社会学的研究、第三章近世に於ける社会学的研究、第四章社会学成立の因縁、第五章オーギュスト・コムト、第六章社会学の学派、第七章社会の生物的考察、第八章社会の心理的考察、其一社会の根本現象の研究、第九章社会の心理的考察、其二社会意識の研究、第一〇章社会学研究の現状、附録、社会化論梗概」より構成されていたが、わが国において本格的に学史研究の必要性が認識され、またその機運が熟してきた動きを捉えたものであった。この書の「序」に次のように記している。「社会学なる名称の生じてからは今に至るまで僅かに七十年。学令に於ては未だ幼稚であるが、諸般の社会的科学の進歩の後を受けて、科学的知識の旺盛な時代の潮流に乗じた為め、斯学の進歩は我が現代の日本の進歩の如く、極めて急速で且つ赫々たる成效を示しつつある」。しかし「かくその進歩は著しいが、その学令の若いだけに、未だ全般の問題に渉って悉く完璧に近づきつつあるとは云はれぬ。未開の領域は少くない」。「是に於てか一方には古来の社会研究の大勢と斯学成立の因縁や必要を熟知し、他方には現代に於ける斯学研究の大勢を通覧しなくては、充分に斯の学を解することは出来ぬ。社会学の歴史の必要は即ちここにある。そして今の時代に於て特にその必要を感じる」。[27]

コント以前の社会学的研究、「社会学成立の因縁」、「オーギュスト・コント」、そしてその後の動向に照らして「社会学の学派」を検討し「吾人は社会学研究の上に種々の学派の存在するのを見る。即ち社会観の上から見ると、生物学的社会観及び心理的社会観の二派、社会研究の基礎科学の点から見ると生物学的社会学、人類学的社会学及び心理学的社会学の三学派が存在するのを見る」[28]として社会学の諸分派を位置づけ、他に統計学的社会学、史学的社会学、国家学的社会学にも触れている。このような学史観に立脚して「社会の生物学的考察」（第七章）をとりあげ、「社会と生物的有機体との差は、有機体の要素を結合する生理的力に代りて、社会の各成素を結合せしむべき力、及び社会に於ける意識の二問題に帰着す可き事が明にせられ、ここに社会の心理的考察となり、一方に社会の根本現象もしくはその現象を他のものより区別せしむべき特異性の研究となり、他方には社会意識の研究となった」[29]としてそれらの動きを明らかにしていた。樋口によるこの学史研究は、従来の有賀長雄の学史研究や建部遯吾の学史論に比して画期的なものであった。

更に、本稿の意図に照らして日本社会学史研究という観点からみても、「第一〇章社会学研究の現状」の末尾に、日本に於ける社会学の研究について次のように言及していたのは興味深い。

> 我が日本に於ては故外山博士はじめ社会学の講座を東京帝国大学に担任したこの方、社会学の研究次第に起り、加藤（弘之）博士は主として倫理の方面から、穂積（陳重）博士は法学の方面から、共に社会学研究に入り、有賀（長雄）博士、浮田（和民）博士なども亦社会学の研究に勉め、現今に於ては建部（遯吾）、遠藤（隆吉）両博士を初めとして新進の学者が斯学の研究に潜心するもの漸く多きを加えるに至った。左に其主として社会学に関する著書を掲げる（同書、一三七―一三八頁）。

ここでは、樋口が挙げている「社会学に関する著書」を表1に一覧としてまとめておきたい。社会学史研究のなかで漸く「日本に於ける社会学の研究」が論じられ出していく嚆矢としても注目されるし、次節で検討する下出隼吉の日本社会学史研究に連らなるものでもあった。しかし、この一覧をみてもわかるように下出の試みに比すれば極めて限

表1．日本に於ける社会学の研究（社会学に関する著者および著書）

故外山正一著
「丶山存稿」

加藤弘之著
「强者の權利の競爭」
「天則百話」
「加藤弘之講演集」
「道德法律進化之理」
「自然界の三大矛盾と進化」　其他

穂積陳重著
「法典論」
「隱居論」
Ancestor-Worship and Japanese Law
（祖先崇拜と日本の法律）
「五人組制度　其他」

有賀長雄著
「社會進化論」
「族制進化論」
「宗教進化論」

「歴史に於ける社會政策」　其他

浮田和民著
「社會學講義」

岸本能武太著
「社會學」

建部遯吾著
「普通社會學」（四卷）
「理論普通社會學綱領」
「戰爭論」　其他

遠藤隆吉著
「近世社會學」
「支那思想發達史」
「應用社會學講話」
「日本社會學研究所論集」
「社會心理と教育」　其他

小林郁著
「社會心理學」
「コムト」　其他

小山東助著
「社會進化論」

木山熊次郎著
「社會主義運動史」

小林照朗著
「日本之社會」

江部淳夫著
「文明論」

德谷豐之助著
「社會心理學」

樋口秀雄著
「社會心理の研究」
「社會學講話」
「社會論叢」
「社會政策と社會主義」
「社會學十回講義」
「社會學小史」　其他

樋口秀雄『社会学小史』一三八―一四二頁）

られたものでしかなかったといわなければならない。

(三) 下出隼吉の日本社会学史研究

日本社会学界の動きのなかで社会学史研究がどのように展開され、特に日本社会学史研究がどのように試み始められていくのかを先に概観したので、次に下出隼吉の日本社会学史研究を検討していきたい。下出隼吉は一九三一（昭和六）年に齢三十五歳で急逝したが、その遺稿が関係者の努力によって吉野作造の「序文」を付して『下出隼吉遺稿』としてわれわれに残され、またその『遺稿』（非売）のうち明治社会思想史に関する部分が「明治文化研究会」の尾佐竹猛によって下出隼吉著『明治社会思想研究』として公刊されている。[30]

下出隼吉については「氏は人も知るごとく、『社会学雑誌』の創刊並びに継続のために大努力を払われた人であるが、一方また、明治社会思想史の研究者としても著名であった。したがって『下出隼吉遺稿』は、日本社会学史研究者にとって、極めて有力なる研究資料の一つである」。「……下出氏は、僅に三十五歳で他界し、したがって自らの研究を体系化する余裕がなかった。それ故に『明治社会思想研究』一巻は、故人の研究の結論でなくて、研究の過程の表示である」[31]という指摘がなされていた。にもかかわらず、本論の「はじめに」において触れたように終戦後の日本社会学史研究のなかでは下出隼吉については言及はされても、下出の日本社会学史の研究はむしろ断続のままにされてきたといえるだろう。ここでは、その研究の継承という観点から再考察していきたい。以下(1)下出隼吉の略歴と卒業論文、(2)「日本社会学会」の設立と「明治文化研究会」への入会、(3)日本社会学史研究の順で考察してみたい。

(1) 下出隼吉の略歴と卒業論文

下出隼吉は、一八九七（明治三〇）年二月一四日に父民義、母アイの次男として愛知県愛知郡熱田町で出生した。

幼時より喘息等の病いで就学上の困難のため、種々転学を重ねながら、一九一五（大正四）年三月私立明倫中学校を卒業、一九一七（大正六）年四月には慶應義塾大学予科に入学、同年九月に第八高等学校に入学し、一九二〇年七月同校を卒業（二十四歳）し更に同年九月東京帝国大学文学部に入学、翌年に結婚しており、一九二三（大正一二）年三月同大学文学部社会学科を卒業している。卒業論文は「消費の社会的妥当性と其基調」と題するものであった。(32)

同じ年の四月には同文学部大学院に進み、文学部副手となる。同年九月一日、「関東大震火災に遭遇、同夜半自宅全焼し家財一物を剰さず焼失」。一九二四年には「日本社会学会」の創立に中心的に参画して、機関誌として新たに発刊された『社会学雑誌』に「明治社会学史資料（上）（下）」を執筆（第一八号、第二三号、大正一四年一〇月、一五年三月）するなど次々と日本社会学史研究、明治社会思想史研究を開始していった。興味深いのは、一九二七（昭和二）年四月に東京帝国大学経済学部経済学科に入学し（三十歳）、一九三〇（昭和五）年三月に卒業していることである。この間に吉野作造、尾佐竹猛らによる「明治文化研究会」に入会して『明治文化全集』の編集にかかわり分担していくことになる。昭和五年には講師として明治学院で「経済政策」を講義する機会をも得たが、翌六年に「歴史に観たる本邦に於ける社会学と公民教育との関係」（『季刊社会学』第一輯、昭和六年四月）を最後の遺稿として、同年五月一五日に三十五歳の若さで急逝された。(33)

下出が大正一二年一月末に提出した卒業論文「消費の社会的妥当性と其基調」の内容構成は、緒論社会発達と進化、第一章消費生産の発達過程と其相互関係、第二章経済学説に現はれたる生産消費、第三章現代社会の経済的状態、第四章生活の方便化と社会問題、第五章社会改善と消費、第六章消費研究の必要と其社会的妥当性、第七章消費の社会的妥当性と社会学、第八章消費の社会的妥当性研究の基調、結論消費の社会的妥当性の究極目的、附録参考書からなるものであった。(34)

当時の生活関心や社会問題に照らして人々の生活における「華美な生活」と「悲惨な生活」の階級分化、特に経済

生活における生産と消費の「跛行的なる状態」に対する問題関心から論文が説き起される。生産消費の発達過程において、「……消費は更に顧みられず全く生産本位にして両者の間隔著るしくなり、生産のみ進歩して消費は之に伴はず跛行的なる状態を生ずると共に消費者の利益は無視せられて生産者の利益のみが重ぜられるに至った」[35]という問題意識から「人間の尊厳」を達するために「人間の生活における消費の改善」を図ることが必要であり、消費の社会的妥当性を社会学的に解明しなければならないとする。そうした問題の重要性にもかかわらず、経済学にしても現代においてはいまだ消費の研究を無視したり放任してきており、他方で消費は慣習、道徳、流行、社会心理など社会意識とも密接しているところからして「社会学に依りて研究すべき性質のものにして又せざるを得ないものと吾人は思惟せざるを得ない」[36]とする。

第八章の「消費の社会的妥当性研究の基調」がこの論文の課題の中心をなしている。現実には人々の間にさまざまの異なる「生活様式」があって消費もそれらに応じて異ならざるを得ない。「文化の発達」「地方別」「職業別」「個人別」の如何によって生活様式も異なる。しかし、「……人の欲望は種々の生活様式或は社会によって異るとは雖も其間に自ら一定の標準が社会に厳存するものである」[37]。それは一つには「家族」によって、二つには「階級」によって統制されており、それらによって「衣食住に関したる必然的欲望のみを満足せしむる生活と、単に必然的欲望のみならず身分的快楽及び奢侈的欲望を満足せしむる生活」とがあり、そこから「如何なる標準の下に今日の現存する階級の何れを選び之が階級に属する家族の生活標準を基準として以て研究すべきかと云う問題が此處に起り来るのである」[38]。

そこで、下出は階級論を概観して「中流階級の生活程度」「中流階級の家庭経済を基調として、食糧衣服住居等の細部に就いて諸科学及び社会学によりて研究」を進め、「以て社会的に妥当なる一定の標準生活を樹立し之に照し合すを得ば、各人の消費の社会的妥当なりや否やも知り得可く、又之に依りて各人の消費行為を指導するを得ば、生活

費の増加を理由として賃金の増加を要求せんとする声の益々大ならんとする現今の時代に於ては、之が賃金制定の標準ともなるべく、産業界の平和の為めにも亦各人の健康及び幸福の為にも、大いに資する所あるべく、又かくすること最も肝要なる事なりと思うのである」[39]としていた。

これは下出隼吉の大学での卒業論文であり、当時の生活問題、社会問題のひとつとして消費生活の側面をとりあげて一定の標準生活を設定することによって現代の人間生活の向上に資するという目的、規範的な政策的な課題を強く意図したものであった。数多くの経済学や経済史等の内外の文献、社会学の文献を参照し、また森本厚吉『生活問題』『新生活研究』、戸田貞三『私有財産問題』、米田庄太郎『現代人口問題』、建部遯吾『普通社会学』、高田保馬『社会学原理』等の多くの文献などにも言及しつつも、当時わが国で既に試みられていた高野岩三郎の家計調査を初め細民調査、労働調査、衛生調査、住宅調査等の既存の実証的な研究に触れるところはなく、専ら学説的な、理論的な考察を中心とするものであった。下出の社会学者としての初期の関心が、生活様式論や消費の社会学という新しい研究分野に向けられていたことを知る貴重な資料といえる。

(2) 「日本社会学会」の設立と「明治文化研究会」への入会

現在の日本社会学会に連らなる「日本社会学会」の設立時期の記述をめぐって、従来(i)一九二三（大正一二）年、(ii)一九二四（大正一三）年のふたつがあった。学史研究のうえでわたくしは先に「「日本社会学会」の設立とその後の経緯[40]」という論稿において、下出隼吉、藤原勘治、林恵海、今井時郎、戸田貞三、松本潤一郎などの努力によって『社会学雑誌』の創刊とともに一九二四（大正一三）年五月の設立とされてきた経緯を明らかにしている。「日本社会学会」の創立をめぐっては、とりわけ下出隼吉の努力と活躍が大きかったのである。

下出は大学卒業後直後で、文学部副手の当時であったが、新しい学会組織の設立を求めての動きは、『下出隼吉遺

稿』に収められた関係諸氏の文章に記録されている。「君が大正一二年東大社会学科の業を終へられた時宛も日本社会学界は適当なる指導機関の確立なく頗る渾沌たる情勢を呈して居りました。君は身を挺して此の匡救に志し着々準備を進められ遂に翌一三年五月我日本社会学会の創立を見るに到りました」（日本社会学会代表戸田貞三の弔辞、七四八頁）。「この寡言で、周密で、無駄がなく、万事に手堅い感じを与へた下出君の性格なり行動こそ、単に資金的援助に止まらず、雑誌経営、学会處理の中枢者として其後数年間に亘り、社会学会のために多大の貢献を遺されたものと信じます」（藤原勘治「心友下出君」、七六二頁）。「君の未完成な生涯比較的短かった生涯は其の短かったが故に其の未完成であったが故にそして君のこうした事への関心と努力とが甚だ大であったが故に殆んど此の事の為に大部分を費して了はられたかの観さへある。それはいうまでもなく日本社会学会の事業である。君の東大社会学科を卒業せられると間もなくから足掛六年行悩んでいた社会学会の歩みを何れだけ促し進めたことか」（今井時郎「隼吉君の横顔」、七五三―四頁）。

社会学の学会組織としては既に建部遯吾を中心として大正二年に設立された「日本社会学院」が当時現存していたが、「どうも社会学院の運営の仕方が専制的で、若い連中からいわせると面白くない。もう少しデモクラティックな学会をも作ろうではないかという気運がその前からあったのですが、機が熟してきたというのか、帰朝して間もない私のところに、下出隼吉君が来て相談がもちかけられました」と戸田貞三が終戦後に思い出を所懐しているように、[41] 下出隼吉など若い社会学者が中心となって学問運動の新しい動きを支えていったといえる。近代日本社会学史研究のうえでは、この「日本社会学会」の創設に関しても下出隼吉の活躍と足跡を忘れてはならないだろう。新たに創設された「日本社会学全」の機関誌『社会学雑誌』に「明治社会学史資料（上・下）」（大正一四年一月、大正一五年三月）、「フェノロサと日本の社会学」（昭和四年一月）などを発表していく。

下出のもうひとつの学問活動の場は、彼の明治社会思想への関心とともに昭和二年に入会した「明治文化研究会」

であった。「明治文化研究会」は、吉野作造、尾佐竹猛、宮武外骨らによって一九二四（大正一三）年に設立されたものであった。下出の明治社会思想に関する仕事は、雑誌『新旧時代』に「自由民権論と其当時の社会学」（大正一五年八月）、「明治社会主義文献の二、三に就いて」（昭和二年六月）、『明治文化』誌上に「内地旅行論」（昭和三年一月）、「進化論と社会解放運動」（昭和四年二月）、『明治文化研究』誌上に「代議政体の研究」（昭和三年七月）、を発表し、更に『明治文化全集』の内に「解題」（「社会平権論」「民権獅惑」「国体新論」「自由之理」「真政大意」）、「自由民権文献年表」（いずれも第二巻、昭和二年一一月）、「解題」（「内地雑居論」「内地雑居続論」）（第六巻、昭和二年一二月）、「解題」（「我国に於ける労働問題一名労働者状態改善策」）、「社会文献年表」（第二一巻、昭和四年二月）、「解題」（「鄰艸」）（第七巻、昭和四年一一月）、「交通年表」（第二三巻、昭和五年七月）などの仕事にかかわっていった。これらの遺稿が『下出隼吉遺稿』に収められていることは後学のものにとって極めて幸いなことである。吉野作造はその『遺稿』に「序」を寄せて、「下出君の学的活動は大別して二つの部門に彙類される。一は社会学の研究で他は明治文化のそれである」。「早くから明治文化の研究にも志されたのは明治時代に於ける社会科学並社会思想の発達の跡を明にせんが為であって固より社会学者としての立場と遠ざかるものではない。故に大別して二つとは云うものの、下出君の頭脳の活らきに於ては二者渾然として一体をなし、思想発展の跡を確実なる史実の上に明證して以て今日に於ける社会指導の原理を樹立せんことが根本の目標であったろう」[42]と述べていた。吉野の指摘する如く、下出隼吉の日本社会学史における「思想発展の跡を確実なる史実の上に明證」しようとする試みに照らして、彼の学史研究を再考すべきであろう。

(3) 日本社会学史研究

学史研究を試みていくに際しては、大きく(a)学史研究が何故必要なのか（学史研究の問題構成）という課題、(b)社会学史資料、(c)社会学史研究の視点、(d)学史の研究史といった主な課題が考えられるが、下出隼吉の日本社会学史研究

に関して(d)については本稿のこれまでのところでも触れてきたので（もちろん、今後も検討を試みなければならない問題は残されている）、ここでは特に下出の試みに照らして(a)社会学史研究の問題構成、(b)社会学史資料、(c)社会学史研究の視点についてわたくしなりに考察しておきたい。

既に「㈠はじめに」のところで触れたように、斎藤正二が「下出隼吉『明治社会思想研究』（昭和七年）は多くの蒐集した資料に基づいて書かれているが、社会学の移入過程や社会学の思想的系譜、すなわち、縦・横を通した歴史的な系譜と現在的な拡がりについて追求は為されなかった。しかも、日本社会学の前史や起源については何等触れることなく、もっぱら主力を注いだのは資料の解説（この研究の特徴をなす）にあった」[43]という指摘は確かに一面では適切であるといえるが、そこにとどまる限りでは下出が日本社会学史研究を「明治社会学史資料㈠㈡」（前出、大正一四・一五年）を以って開始していった当時の状況、下出の意図や姿勢を適切に理解することにならないであろう。下出に従って吉野作造のいう「思想発展の跡を確実なる史実の上に明證」しようとする彼の意図や姿勢を再考察すべきである。

下出の「明治社会学史資料㈠㈡」には実に二四〇点余りにのぼる文献資料が蒐集掲載されている。これは、樋口秀雄『社会学小史』のなかで言及されていた「日本に於ける社会学の研究」の文献資料（表1参照）の三〇余点に較べると、数においても圧倒的である。資料蒐集にあたって冒頭で次のように述べている。

近頃明治文化研究の機運の著るしく盛んになれると共に、之が資料の蒐集、整理の必要となれるは言うを俟たない事である。我社会学界にとっても、所謂社会学説が本邦に紹介せられて此方、過去四十余年の文献資料が、時の流れと共に、益々散逸する恐れのある今日、之が資料の蒐集整理及研究は徒爾でないと思う。

若宮卯之助は本誌第八号「日本社会学の方向」に就いて我社会学の無方向と歴史的連続性を欠ける事を説いて居られる。……。併し乍ら其多くが、仮令翻訳、解説のしっ放しであり、無方向であろう共、今日我日本に於いて、社会学研究の漸く盛んにな

れるは、之等の文献を発表せられし先輩諸士の努力にも負う所で、震災等により追々古い文献の失われてゆく今日、私は之等の人々の社会学的文献に限りのない愛着を覚ゆると共に、語学の発達未だ充分でなく、其研究の困難なりし明治の初年、所謂新文化創成期に於いて発表せられた社会学に関する文献資料が、其態様の現時に比して、甚しく稚拙であったとは云へ、相当苦心せられた跡を見る時に、是に敬意を表すると共に、私は之等文献資料を記録に留めて置きたいと思う。」(「明治社会学史料(一)」『社会学雑誌』第一八号、大正一四年一〇月、『下出隼吉遺稿』所収、一七三―四頁、『明治社会思想研究』三五〇―一頁)

「社会学研究の漸く盛んになれる」現時の態様のなかで、他方で若宮卯之助の如く「我社会学の無方向と歴史的連続性」の欠如が説かれるような状況と「時の流れと共に」「震災等により」文献資料がますます散逸し失われていく状況のもとで、下出が学問活動としての社会学の足跡を記録にとどめ、問い直そうとして日本社会学史研究を目論み、「社会学的文献」資料の「蒐集・整理・研究」に着手しようとしていたことがわかる。ここに下出隼吉による(a)日本社会学史研究の問題構成が如実に示されている。

「社会学的文献」資料の「蒐集・整理・研究」を下出はどのように展開していったのであろうか(b)社会学史資料、(c)社会学史研究の視点)。現実には下出の急逝によってその志し中途で多くはその「蒐集」に終始して「整理」や「研究」には到達しないで終ったと評価しなければならないだろう。しかし、ここでは彼が遺した「社会学史資料」そのものに立ち返ってみたい。

下出が日本社会学史研究を志したときに、樋口秀雄などによって漸く試みられつつあったとはいえまだ未開拓の領域であった。まずは当時の状況に照らして「社会学的文献」資料の蒐集と記録という作業から始めなければならなかったといえるのかもしれない。下出の記録した社会学的文献資料の内容に触れることによって、彼の日本社会学史研究の視点も見えてくるのかもしれない。

樋口秀雄による「日本に於ける社会学の研究」では、外山正一、加藤弘之、穂積陳重、有賀長雄、遠藤隆吉、小林

郁、小山東助、木山熊次郎、小林照朗、江部淳夫、徳谷豊之助、樋口秀雄などのように限定されたものとして主として社会学にかかわった日本人の文献資料が挙げられていた。しかし、下出による「明治社会学史資料」にみる「社会学的文献」資料の内容は一見して、樋口の「日本に於ける社会学の研究」のそれとは明らかに異っていることがわかる。第一に目につくのは、「明治四年、自由之理　中村敬太郎訳。原著John Start Mill : On Liberty, 一八七〇年、倫敦出版」、「明治一四年、社会平権論、英国袍巴士斯辺瑣著、松島剛訳。原書。H. Spencer : Social Statics, 1864, 2nd edition.」、「明治一五年、社会学之原理、外出正一閲、乗竹孝太郎訳述。原書、H. Spencer : The Principles of Sociology, vol. 1.」などのように、明治初年から、特に明治一〇年代にスペンサー、ミル、ベンサム、コムト、ヴィコ、ギゾー、バックル、ダーウィン、フェノロサなどの著作の翻訳紹介、やがて明治期後半においてはマルクス、エンゲルス、ケレー、バスコム、ウォード、スタイン、グムプロヴィッツ、マクレナン、ウェスターマーク、ラボック、ギディングス、ジンメル、スモールなどの翻訳紹介に関する文献が数多く挙げられており、広い意味で「社会学」をとらえ、主として西欧の社会思想、社会学思想や社会学の動向の我国への翻訳紹介・移入移植の過程に着目して、先学によるそれらの足跡（「相当苦心せられた跡」）を克明にしていることである。下出のこうした関心は、「スペンサーと其学説」（『東邦』第二号、大正一四年一二月、『遺稿』所収、二三四―九頁）、「ミルとスペンサー――明治文化に及ぼした影響――」（『経済往来』第二巻八号、昭和二年八月、『遺稿』三一五―三三〇頁、『明治社会思想研究』三四―四九頁）、「日本の社会学とフェノロサ」（『東京帝国大学新聞』第三二五号、昭和二年一〇月二四日、『遺稿』三三一―三三四頁）、「フェノロサと日本の社会学」（『社会学雑誌』第五七号、昭和四年一月、『遺稿』四〇八―四一二頁、『明治社会思想研究』一一一―一一五頁）などに示されている。

第二に特徴的なことは、下出の「社会学的文献」には、政治論、経済、哲学、教育等や社会問題、労働問題、社会主義、社会運動、社会政策等の内容にも及ぶ文献資料を含めていることである。この時期が列強国を前に近代日本の

国家体制の模索・建設を急速に推し進めていく時期であり、また近代日本の社会学の生成期であり、社会進化をめぐる論争、総合社会学的な色彩が濃いことも反映されている。例として「明治一一年、交際論付経済、米国ペンシルバァニャ大学トンプソン著、加藤政之助訳」、「明治一一年、斯辺撒氏代議政論、鈴木義宗訳。原書H. Spencer : Representative Government.」、「明治一三年、斯氏教育論、尺振八訳。原書、ス氏Education ; Intellectual, Moral and Physical, 1875.」、「明治一五年、社会哲学、全。林包明著」、「明治一五年、人権新説、全。加藤弘之著」、「明治一九年、理学鈎玄、中江篤介著」、「明治一九年、哲学要領、文学士井上円了著」、「明治二五年、社会問題、前・後編。板垣退助、中江篤介序、江口三省訳。原書Henry George : Social Problem.」、「明治二七年、個人対国家論、社会文庫第一篇。法学士永井久満次訳述。原書H. Spencer : The Man versus the State.」、「明治二七年、草茅危言日本之社会、桜井吉松著」「明治二七年、社会問題、完。金井延講述」、「明治三二年、日本之下層社会、横山源之助著」[44]、(同じ明治三二年には)「欧州労働問題の大勢、法学士桑田熊蔵著」、「新聞学、松本君平講述」、「社会的制度一班、二〇頁、窪田静太郎著」、「明治三四年、社会問題講釈法、安部磯雄著」などが挙げられる。

また、下出による「明治初期政治論に及ぼしたる社会学の影響に就いて」(『東亜の光』第二巻五号、昭和三年五月、『遺稿』三七八—三九二頁、『明治社会思想研究』五〇—六四頁)、「自由民権論と其当時の社会学」(『新旧時代』第二年第四回五冊、大正一五年八月、『遺稿』二四〇—二六〇頁、『明治社会思想研究』一三—三三頁)、「天賦人権説に関しての加藤外山両博士の論争に就いて」(『遺稿』四三七—四四八頁)、「社会学の揺籃時代—片山潜氏の傾向—」(『東京帝国大学新聞』第二六五号、昭和三年一〇月一日、『遺稿』四〇三—四〇七頁、『明治社会思想研究』一二五—一二九頁)などの論稿にも、こうした政治論、社会問題研究、社会運動、社会主義運動等と社会学との交錯していた状況とそれらの動きを日本社会学史のなかに位置づけていた。

更に第三に、樋口秀雄が列記していた外山正一、加藤弘之、穂積陳重、有賀長雄、浮田和民、岸本能武太、建部遯

吾、遠藤隆吉、などの主な社会学者・社会学文献と重複して彼らの文献資料をより詳しく他の文献とともに挙げている一方で、他の社会学者・社会学書をも数多く蒐集しようとしていたことである。「明治二一年、社会学、文学士三宅雄二郎講述、伊達周碩筆記。原書 L. E. Ward : Dynamic Sociology.」、「社会之顕象　何をか社会の顕象と云ふ、久松義典著。」、「明治二二年、社会学、民谷吉次郎著、新撰百科全書第一六編—第二二編に掲載」、「明治二三年、社会学、辰己小次郎講述。哲学館講義録に掲載」、「明治二七年、社会学、通俗教育全書第八一九編。渋江保著」、「明治三三年、社会学、早稲田叢書。文学博士元良勇次郎閲、文学士遠藤隆吉訳。原書 Giddings : The Principles of Sociology, 1896.」、「明治三四年、社会研究新論、狷堂久松義典著」、「社会学提要、中島力造校閲、十時彌著」などがその例である。

明治期の社会学界の活動は、主に、東京帝国大学などの官学やその出身者によるところが大きかったとしても、布川孫市が後年に「明治三〇年前後の社会学界、社会運動に関する追懐談」[45]で明らかにしているように、社会事業、社会改良運動、社会問題研究、社会学、労働運動、社会主義運動、社会政策等との関連で学問運動が試みられていく特徴も強く、従って、浮田和民、岸本能武太、安部磯雄、村井知至、布川孫市、高木正義、賀川豊彦、片山潜などにみるように京都同志社、青山学院、明治学院、立教大学、その他の出身者で宗教関係者、特にキリスト教関係者、またキリスト教関係者で社会事業関係者、社会主義者などの多様な系譜の人達が参画していく動きであったことも注目しておかなければならない。[46] 下出の「明治社会学史資料(一)(二)」（大正一四・一五年）では「明治三一年、社会学　完。岸本能武太講述。東京専門学校蔵版」、「社会学、高等師範学校教授マスター・オブ・アーツ岸本能武太著。大日本図書株式会社発行」、「明治三四年、社会学講義、帝国教育会編纂。辻新次序、浮田和民講述」などが挙げられ、「社会学の揺籃時代—片山潜氏の傾向—」（前出）などの短い論稿があるとしても、近代日本社会学の形成にかかわる多様な系譜を跡げる試みには十分に応えてはいない。

下出による資料蒐集の第四の特徴は、社会学の研究方法との関連で統計、史学研究、人類学などに関する文献をも「社会学的文献」として挙げている点であろう。「明治二〇年、統計詳説、一名社会観察法、呉文聡著」、「明治二一年、応用統計学、呉文聡著」、「明治二七年、歴史研究法、通俗教育全書第九五編。ヘーゲル原著、渋江保訳述。原書G.W.F.Hegel：Lectures on the Philosophy of History.」、「明治三三年、社会統計学、原著者メーヨー・スミス著、呉文聡訳著」、「明治三六年、人類界之現象、坪井正五郎序、大鳥居弁三著」、「史学研究法、早稲田叢書、坪井九馬三著」などである。また、下出には「統計という言葉—本邦統計学史の第一頁—」(『統計集誌』第五五七号、昭和二年一二月、『遺稿』三四一—三五八頁、『明治社会思想研究』一三六—一五三頁)などの論稿もある。社会学史のなかに、学説史や理論史だけでなく、こうした研究方法(観察方法、調査方法)の展開をも含めて跡づけようとする試みは重要であると考える。

下出隼吉は自ら「日本社会学会」の創設に尽力するところが極めて大きかったが、日本社会学史研究においても、「東大社会学研究室創立満二五週年を迎えて」の論稿を書いたり、先にも触れたように布川孫市を通じて『社会学雑誌』に布川の「明治三〇年前後の社会学界、社会運動に関する追懐談」を載せているように、学問運動としての社会学活動の組織化や制度化にかかわる資料を残したことも特筆すべきことであろう。そうでなければ、特に明治三〇年前後から同三〇年代にかけての布川孫市、高木正義、加藤弘之などによる「社会学会」「社会学研究会」の活動、建部遯吾による東大社会学研究室の創設などの動きを、後年になって知ることはなかなか困難であったろうと思う。日本社会学史のなかにそれらの足跡を適切に位置づけていく作業も難しかったろう。それだけに社会学史研究における資料のもつ重要性をも想起しなければならないだろう。

下出隼吉の日本社会学史研究が「資料の蒐集整理及研究」のうち、彼の急逝のために多くはそれらの蒐集整理に終って、その学史研究へと本格的に深められなかったことは認めなければならない。しかし、われわれが(c)彼の社会学

史研究の視点をあらためて再構成し、それらの可能性や問題点を問い直すことはできないだろうか。

社会学史研究の基底をなす下出の社会観は、「明治初期政治論に及ぼしたる社会学の影響に就いて」（前出）の論稿、「社会文献年表」（『明治文化全集』第二一巻・「社会篇」、昭和四年二月）などに示唆されている。

……当時割合に早くより多くの社会学的思想の取り入れられしことは、社会百般の改革を行うの時に当りて、社会なるもの（傍点筆者）に目をつけるに至り、之を意識するとせざるとに拘わらず社会を根本的に知るの必要が起りしからではなかろうか。而して斯る礎地の存したることは多くの社会学的思想の取り入れられし因をなせると共に、又一方之等の思想学説の受け入れられしことが尚一層集団意識の発達を促し、各方面殊に政治思想に顕著なる影響を及ぼし、或は学として社会学の発達を促進したものではなかろうかと思うのであって、要之に何れにしても兎に角ミル、スペンサー等の社会学的思想学説なるものは広く我が国に伝わり一時非常に持囃されたものであり、其政治論に及ぼしたる影響は非常なものであった様に思われるのである（『東亜の光』第二三巻第五号、昭和三年五月、『遺稿』所収、三九二頁）

「社会」（society）や「統計」（statistics）が単なる翻訳語にとどまるものであったり、「社会」が「急速で跛行的な工業化の過程で、統一的な既存の秩序からはみ出し、おちこぼれた部分として意識された」[47]ものとしてではなく、下出は、「社会なるもの」の生成・形成過程を社会学的思想の紹介や取り入れとともに、社会制度、政治論、社会事業、社会問題、社会主義運動、「婦人問題、社会文芸」等がさまざまに広く交錯していく過程で集団意識や集団関係を生成・形成していく動きとしてとらえようとしていたことがわかる。その意味では、近代西欧社会や市民社会論の枠組をそのままの形でもち込もうとする視点とも異なる。

そして、現実に「社会なるもの」の生成・形成されていく過程で、「学としての社会学の発達」をも促していくという視点も興味深い。社会的現実と学としての社会学の関係が把握されていた。ここではまだ「学としての社会学」が一人歩きしていない。これは、下出の「社会学観」のひとつの特徴であろう。更に「義理に関する一考察」と題す

る論稿で次のように指摘していることも注目してよい。

日本の学者が多く外国の学説のみを研究し日本そのものを研究せざる事は甚だ遺憾千万である。古き歴史を有する日本には家族問題其他凡ゆる方面に於いて研究すべき社会事象が多く存するのである。義理人情と云う事は之を深く研究すれば極めて面白く、且日本の社会状態を研究するに見逃すべからざる事であると思う（『東邦』（東邦商業学校校友雑誌）第一号、大正一四年七月、『遺稿』一七二頁）

しかし、下出はこうした視座を用意していたにもかかわらず、この研究は果されなかった。この点を日本社会学史研究に照せば、(i)西欧・外来の社会思想、社会学的思想の移入・摂取過程の研究とともに、(ii)在来・土着・伝統の社会思想、社会学的思想の保守・継受・再解釈・批判の作業も学史研究のうえで大切な研究課題であったに違いない。このような競合し、抗争し再解釈、創造する思想状況と、政治論、殖産興業、社会問題や社会運動などの渦巻く明治期の新たな歴史的社会的状況のなかで、(iii)学問運動としての社会学が個別科学としてどのように展開し、繰り広げられていくのかを学史として経験的に実証的に考察していくことが課題であったろう。下出の学史研究は、そのような課題を示唆しつつも、それらを充全に果すことができなかった。

だが、吉野作造が下出の研究姿勢について「社会学の研究」と「明治文化の研究」を一体のものとして接合すべく、「思想発展の跡を確実なる史実の上に明證」していこうとする問題構成と研究態度、それに基く「社会学的文献」資料は、後学のものにとって共有し活用し得るものとして残されている。このような態度や資料は学問的な遺産として継承されるべきであろう。資料のなかに、松原岩五郎『最暗黒の東京』、横山源之助『日本之下層社会』など、また統計、史学研究、人類学等の文献をも含めていたことは、社会学上の経験的な調査研究、研究・調査方法の問題をも考えていこうとする経験的・実証的な関心を示唆するものである。

下出は「明治社会学史資料㈠」（大正一四年）のなかで、「我社会学史を三つの時期に分ちたい」として、第一の起

点を有賀長雄の社会学（㈠社会進化論、㈡宗教進化論、㈢族制進化論）が刊行された明治一六年におき（第一の時代）、第二の起点を「夫れより約満二〇年を経過せる明治三六年三月七日、即ち東京帝国大学文科大学に於いて本邦最初の社会学研究室が開かれた時」におき（第二の時代）、第三の起点を「社会学の文献を多く蔵せる点で有数の東京帝大文学部社会学研究の焼失したる」大正一二年九月一日の震災の日におく（第三の時代）という彼の試論に従って、文献資料の整理をしていた。第二の起点である建部遯吾による東京帝大文科大学社会学研究室の開設といった区分は、東京帝大などを中心とした官学中心の時期区分であり、こうした発想は明治一六年から三六年迄の間の文献資料の蒐集においても充全に期し得なかったものと考えられる。そして、前述したように、後になって「社会学会」「社会学研究会」の中核であった布川孫市を通じて布川「明治三〇年前後の社会学界、社会運動に関する追懐談」を『社会学雑誌』（昭和三年九月）に掲載しているのは、その充全でないことの下出の反省とその後の彼の社会学史研究の展開を反映している、と考えることもできる。下出によるこの時期区分も、近代日本社会学史という観点に立てば、再考されなければならないだろう。

従って、日本社会学史研究において明治一〇年代から三〇年代にかけての動きについても、学問運動としての社会学の形成が生成と制度体の社会学、自由主義的な社会学の系譜と社会（国家）有機体的な社会学とが相互に交錯していく状況であり、東京帝大社会学研究室の開設を以って起点とする考え方は、他方の系譜を力点にするひとつの社会学史観にすぎないとも考えられる。これまで、我が国の日本社会学史研究は、建部遯吾などの国家有機体説による社会学の体系化の系譜にかなり傾斜して試みられてきたといえなくもない。[48] 下出の社会学史研究には、一方の自由主義的社会学の系譜の競合していく過程を再構成し、再考察し得る資料ともいえる。いまだに未開拓のままにされてきた研究領域といえる。下出が日本社会学史研究の過程で蒐集整理した「社会学的文献」資料は、その意味でもわれわれに託された貴重な資料である。

㈣　むすび

本稿は、近代日本社会学史研究における断続と継承という観点から下出隼吉の社会学史研究をとりあげたものである。社会学史研究も、さまざまの社会的出来事や運動、戦争や戦禍、災害、帝国主義的拡張主義などが起り、さまざまの暮しが繰り広げられる歴史的社会的な動きとその時々の学問動向とのもとで試みられるところから、かつての足跡や業績が適切に批判的に継承されずに、無批判に受けついだり断続しがちである。近代日本のように激的な社会変動におかれた状況においては、そうした断続が起りがちであり、学問的な業績を蓄積し活用創造していくことよりも新しい学問動向を追いかけその摂取に力をそそぐことが多い。学としての社会学に集中するあまり社会的現実の動きからも目を離しがちになり易い。

この小論では、下出の（主に明治期）日本社会学史研究を、有賀長雄、樋口秀雄の日本社会学史研究の歩みとの対比を通じて、日本社会学史研究の最初の開拓者としての下出隼吉の業績を明らかにしようとした。確かにその研究は「資料の解説」に終始したという評価を受けざるを得ない面も認められる。だが、下出は書誌的な研究にとどまったとはいえ広く「社会学的文献」資料の発掘や蒐集から始めざるを得なかったところも事実なのであり、「思想発展の跡を確実な史実の上に明證」しようとする研究態度をもって経験的、実証的な学史研究を意図していたといえる。

一九三一（昭和六）年三十五歳の若さで急逝したことによって、下出の研究は中断することにはなったが、彼の『遺稿』や『明治社会思想研究』に刻まれた資料より、下出隼吉の社会思想史、社会学史の基本的視点や構造を再構成していくことによって、彼の社会学史研究の可能性や問題点を再考察してみることがここでの目論見であり課題であった。近代日本における「社会なるもの」の生成・形成過程と「学としての社会学」の形成との関係において、日本社会学史を史実のうえに実証的に跡づけようとする下出の学史研究の試みは、資料の蒐集・整理に結果的にとどま

るところとなったとしても、欧米の社会思想・社会学的思想の翻訳紹介・移入摂取の過程に目を向けさせ、また在来・土着の社会思想の保守継受・再解釈・批判等による社会学的思想の展開を関連づけ跡づける作業の必要性をも示唆しているといえる。これらはいずれも下出によっては日本社会学史研究として果されなかった。

また、「明治社会学史資料」として「社会学的文献」資料の蒐集に徹することによって、近代日本において学問運動として社会学の展開が、当初より生成の社会学と制度体としての社会学の交錯する状況にあり、後年の学史研究が明治三〇年代後半以降の建部遯吾の制度体としての社会学をもって日本社会学の成立とする学史観は実は他方の系譜のみを重視した研究であるといえる。それは制度化された社会学の枠内にとりこまれた学史研究でもある。下出の学史の時期区分にもこうした傾向が内包されているといえなくもない。近代日本社会学史において学問活動を大学や民間在野を問わず広く目を向けていくべきであり、自由主義的社会学の系譜と社会（国家）有機体の社会学の系譜などの諸系譜が交錯し変転していく展開としてバランスを失わない方向づけを模索していく必要があろう。それは、また、学史研究がともすると学説史や理論史の研究に偏して、社会観察や経験的研究の足跡を軽視してきた傾向にも、バランスを失した日本社会学史研究の特徴があると考える。[49] 下出の「資料」を重視した日本社会学史研究は、こうしたアンバランスを解消して今後バランスのとれた学史研究を進めていくうえで再考を促す貴重な学問的遺産といえる。

（1）川合「日本社会学の最近の動向と反省」『法学研究』第六三巻三号、一九九〇年三月、一―四二頁。

（2）新明正道『社会学史概説』、岩波全書、一九七七年（改版）、七―八頁。

（3）下出隼吉「明治社会学史資料(一)(二)」『社会学雑誌』第一八号、第二三号、大正一四年一〇月、大正一五年三月、いずれも『下出隼吉遺稿』所収、昭和七年私家版、一七三―二三三頁、下出隼吉『明治社会思想研究』浅野書店、昭和七年、三五〇―四一〇頁。

（4）松本潤一郎「日本社会学の沿革と展望」松本『社会学』所収、浅野書店、昭和七年、高田保馬「日本に於ける社会学の発達」岩波講座『教育科学』第一八冊、昭和八年、加田哲二「日本の社会学及び文献」加田『社会学序説』所収、慶應義塾出版

局、昭和九年。

(5) 高田保馬「日本に於ける社会学の発達」(同前)、四—五頁。

(6) 日本社会学史学会の「設立趣意書」『社会学史研究』会報第一号、昭和三六年四月、二二頁。新明正道「日本社会学史学会の出発にあたって」『社会学史研究』会報第一号、一—三頁。

(7) 河村望『日本社会学史研究』(上)、人間の科学社、一九七三年、一八頁。

(8) 斎藤正二『日本社会学成立史の研究』福村出版、一九七六年、七—八頁。

(9) 有賀長雄「社会学史略」(第一—四回)「社会学史」(第五回)『哲学会雑誌』第一九号(明治二一年八月五日)、第二一号(明治二一年一〇月五日)、第二七号(明治二二年五月五日)、第三三号(明治二二年一一月五日)、第四三号(明治二三年九月五日)。これらの論説は、斎藤正二の努力によって有賀長雄著『社会学史』人間の科学社刊(一九七七年)にして一冊にまとめられている。

(10) 樋口秀雄『社会学小史』二松堂書店、明治四四年。

(11) 『東京大学文学部社会学科沿革七五年概観』、昭和二九年、一頁。

(12) 同、一頁。

(13) 同、一—二頁。フェノロサの社会学講義については、明治一五年のアーネスト・F・フェノロサの講述を金井延が筆記した原稿による英文『フェノロサの社会学講義』(秋山ひさ編・解説)(神戸女学院大学研究所刊、一九八二年)がある。なお、山口静一『フェノロサ(上・下)』三省堂、一九八二年はフェノロサの生涯を知るに極めて貴重な研究資料である。

(14) 外山正一述『丶山存稿』(前編、後編)(全二冊)(明治四二年)、昭和五八年復刻、湘南堂書店。外山正一が「序文」を寄せたH・スペンサー『社会学之原理』(全三冊、明治一七—一八年)を訳した乗竹孝太郎(粛堂)(一八六〇—一九〇九年)は慶應義塾出身で横浜正金銀行、東京経済雑誌などで活躍した人物でもある。

(15) 外山正一『丶山存稿』(前編)(前出)の「凡例」一頁。

(16) 建部遯吾『普通社会学(第一巻・社会学序説)』金港堂、明治三七年、特に「第四章、社会学の将来、第一節明治時代」三五一—三六六頁。

(17) 遠藤隆吉『近世社会学』成美堂、明治四〇年、一六〇—一九五頁。

(18) 『慶應義塾百年史』(別巻・大学編)、昭和三七年。法律学科の外来講師のひとりとして「有賀長雄(国際公法)」(四六〇

頁）、政治科創設当時の外来教師として「総理大臣秘書官文学士有賀長雄（政治史、国際公法）」（四九四頁）の名前が記されている。

(19) 有井博子「有賀長雄」『学苑』昭和四〇年六月、二九―四〇頁。兼近輝雄「有賀長雄」中村元・武田清子監修『近代日本哲学思想家辞典』東京書籍、昭和五七年、三二―三三頁。

(20) 有賀長雄『社会学史』人間の科学社刊、一九七七年、巻末に斎藤正二（解説）「有賀長雄と『社会学史』の意義」が付してある。

(21) 有賀長雄、同書、一五頁。

(22) 同書、二二―二三頁。

(23) 同書、三二頁。

(24) 斎藤正二「有賀長雄と『社会学史』の意義」（前出）、八九―九〇頁。

(25) 川合「解題」『明治期社会学関係資料』（『社会雑誌』『社会』『社会学雑誌』）（第一巻）龍溪書舎、一九九一年、一―三〇頁。

(26) 「樋口秀雄」中村元・武田清子監修『近代日本哲学思想家辞典』（前出）、四八四頁。西野泰子「樋口竜峡評伝」『学苑』昭和三八年九月、五七―六五頁。

(27) 樋口秀雄「序」『社会学小史』二松堂書店、明治四四年、一―二頁。

(28) 樋口秀雄、同書、六六頁。

(29) 同書、一二八頁。

(30) 『下出隼吉遺稿』非売品、昭和七年四月。下出隼吉『明治社会思想研究』浅野書店、昭和七年八月。

(31) 田辺寿利（書評）「下出隼吉著『明治社会思想研究』」田辺寿利・古野清人共編『社会学』第三号、森山書店、昭和七年一〇月、二〇頁、二二頁。

(32) 下出隼吉が東京大学文学部社会学科を卒業したのは大正一二年三月であるが、同期の卒業生、その卒業論文題目は以下の通りであった。森重太郎・組合に関する社会学的二、三の考察、安斎保・監獄の社会的作用を論ず、池端栄・作業発達論、稲垣重厚・支那古代家族制度の研究、松坂達雄・社会組織に関する考察、九條道秀・芸術と環境との関係、小山文太郎・職業教化の研究、谷文一・理想主義の社会観、張有桐・愛新性及憎新性より観察したる中華の社会、畑道雄・日本民俗性概論、浜田

清治・社会の力と権力、原不知雄・社会の動因としての性欲、主としてモデスティの研究、肥田精一郎・家族制度を中心として他の社会団体との関係につきて、福場保洲・社会結合と宗教、藤原勘治・新聞に就いて、三橋逢吉・都市之社会学的考察、山沢為次・社会事業の根本観念及びその基礎的考察、林履信・中華革命の研究、下出隼吉・消費の社会的妥当性と其の基調、近藤健・社会学研究法。『東京大学文学部社会学科沿革七五年概観』(前出)、七八―七九頁。

(33) 『下出隼吉遺稿』(前出)、七二九―七三八頁。「下出隼吉君の長逝を悼む」『季刊社会学』第二輯、昭和六年一〇月、一七〇―一九三頁。

(34) 『下出隼吉遺稿』(前出)、一―一六七頁。

(35) 同書、四九頁。

(36) 同書、一〇一頁。

(37) 同書、一二一頁。

(38) 同書、一二八―九頁。

(39) 同書、一三七頁。

(40) 川合「「日本社会学会」の設立とその後の経緯」『法学研究』第六十一巻五号、一九八八年五月。

(41) 戸田貞三「学究生活の思い出」『思想』三五三号、一九五三年一一月、九四―五頁。

(42) 吉野作造「序」『下出隼吉遺稿』(前出)、一頁。

(43) 斎藤正二『日本社会学成立史の研究』福村出版、一九七六年、七頁。

(44) 『下出隼吉遺稿』(前出)、二一二頁、下出『明治社会思想研究』(前出)、三九九頁。「日本之下層社会、横山源之助著、(明治)三二年四月出版、教文館発行。本書は明治二九年頃よりの著者の調査を集めしものにして、附録に「日本の社会運動」あり」と記されていた。横山の足跡などについても、このように下出によって「社会学史資料」として明らかに記録されてきたにもかかわらず、近代日本の社会学史においても社会調査史においても適切に継承して研究してきたとはいい難い。

(45) 布川孫市「明治三〇年前後の社会学界、社会運動に関する追懐談」『社会学雑誌』(日本社会学会編)第五三号、昭和三年九月。

(46) 富田富士雄「日本社会学史の一支流としてのキリスト教」『社会学論叢』(日本大学)、三七号、一九六七年五月、一一―一八頁。

(47) 石田雄『日本の社会科学』東京大学出版会、一九八四年、四七頁。

(48) 斎藤正二『日本社会学成立史の研究』(前出)。

(49) 新明正道『社会学史概説』(前出)、一四二頁。新明は、「明治三二年には横山源之助によって「日本之下層社会」が刊行されている。これはわが国における調査的研究の先駆的をなすとともに、民間的社会学者の所産として官学の建部の業績と好対照をなすものである」という註をしている。これは社会学の形成を経験的社会論の視点からも考察しようとするもので、極めて興味深い言及であったが、新明自身はこうした視点からの社会学史を更に深めて持続的に展開することはなかった。